

地域の活性化の原動力は、よそ者の参画が引き金となって、地域住民の気づきと協働に結びつくケースが全国的にも一般的な道筋とみられてきています。そして、地域活性化にはもうひとつ不可欠なものとして、地域が持っている社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の蓄積がものをいうと考えられてきました。

2008年に総務省が打ち出した地域おこし協力隊の仕組みを、人口減少社会においてシュリンクする地域力の組み直しをテーマとした、いわば「よそ者による支援」を地域に呼び込む実験として捉え、これまでの地域おこし協力隊の経緯や結果から、地域活性化のヒントを探るべく、(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所に置かれた地域ケイパビリティ研究会（座長：佐藤郁夫札幌大学教授）では、15年8月6日和寒町にて「これからの地域運営は“地域おこし協力隊”に何を学ぶべきか」をテーマに現地研究会を行いました。

研究会では、第一部で道北地域（下川町・和寒町・美深町・士別市）の地域おこし協力隊OBと現役協力隊の4名が事例報告、第二部では和寒町長も含めて座談会形式の意見交換を行いました。今回は第一部の事例報告のあらましを紹介します。

クローズアップ②

地域ケイパビリティ研究会in和寒町 【第一部】

これからの地域運営は“地域おこし協力隊”に何を学ぶべきか

下川町 地域おこし協力隊OB 桑羽 典光さん

山口県山陽小野田市出身の1974年生まれで、団塊ジュニアと呼ばれる世代です。埼玉県で、電機メーカー系列の人材派遣会社で正社員として働き、年に5、6回北海道へ旅行し、北海道新聞を埼玉で定期購読するほど北海道好きで、移住が憧れでした。



埼玉県では、地域とのつながりは一切なく、しがらみのない気楽な都市型生活で、仕事も充実していましたが、東日本大震災で近所づきあいが無い怖さを改めて知りました。40歳を前に会社でのポジションの限界が見え、さらに、リーマンショックを契機に人材派遣業と電機メーカーの成長性に疑問を感じて、北海道への移住の検討を始めました。移住するにあたって、地域おこし協力隊制度の最大3年間は身分が安定し、起業を奨励されて役場の全面的なサポートを受けられることに大きなメリットを感じました。下川町が東京で開催したフォーラムで、町長から町の想いや取り組みを聞き、その後、役場幹部職員に誘われて食事に行

し、下川の地域づくりの想いを直接聞いたことが、地域おこし協力隊で下川町を選んだきっかけです。

協力隊では、限界集落と言われていた一の橋地区の活性化のための活動をしました。行動に迷った時には一の橋のため、下川町のためになるかを判断の基準にするよう、役場の課長から指導を受けました。1年目に草刈と除雪を毎日のように地道にやったことが、地域の方からの信頼につながったと思います。協力隊の任期を2015年3月末で終えて、9月からは協力隊で行った、バイオマスボイラーの管理の経験を活かして、木質バイオマス関連の事業を下川で行う予定^{※1}です。

地域おこし協力隊の制度についての私感は、役場からの情報が得られ、人脈が増えるなどのメリットがある一方、仕事の拘束時間の長さや地域とのしがらみなどのデメリットもありますが、メリットの方が断然大きいと実感しました。ただ、都会で自分探しをしている人には、選択肢が少なく価値観が保守的と言われる田舎での地域おこし協力隊はお勧めしません。

また、協力隊を募集しても、いい人が来ないとよくいわれます。協力隊で来る方にもいろいろなバックグ

※1 桑羽さんは、町内企業社長・協同組合代表理事と共同で、下川町内にバイオマス燃焼機器を販売する株式会社を9月に設立しました。

ラウンドがあり、それをクリアして来るためには相当な覚悟が必要です。また、その覚悟がある方でないとダメだと思います。3年間の派遣社員やリゾートバイトの延長みたいな感覚で地域おこし協力隊を選ぶと、地域にとっても良くないと思います。ホームページに載せて応募を待つ自治体も多いですが、人を採用するにはコストがかかります。いい人を探ろうと思うなら、自治体にも魅力があって、3年後に夢を持てる仕組みがあったら良いのではないかと思います。

協力隊の期間は、下川町の臨時職員扱いだったので、副業が禁止でした。3年以降に起業するのなら、3年目だけは自分でお金を稼げる仕組みが良いと思う場面もあったので、3年目は嘱託、委嘱などの形態を自ら選択できたら良いと思います。それができれば、任期中から起業の準備ができると思います。

和寒町 地域おこし協力隊OB 集落支援員

中野 利樹さん



2010年8月に、東京から和寒町に協力隊として移住してきました。東京では、ソフトウェアの開発のエンジニアで、ITベンチャーを辞めて来ました。出身は北見市で、いつかは北海道に帰りたいと思っていたところ、地域おこし協力隊の制度を知り、応募しました。任期途中の12年、IT関連の事業をする「Cross Road」を立ち上げて仕事を少しずつ始め、13年8月に任期を終了、2カ月後にこの会場のカフェ「nido」を開業して現在に至っています。

協力隊の活動の1年目は、和寒町を理解するため、各施設を回ったり、商工会や農業関係者と一緒に町の行事やイベントに参加しました。また、農業を理解するために、農業活性化センターでの研修の後、町内の農家で一通りの農作業体験もさせていただきました。2年目には、町民に提供できるもの、地域が盛り上がることを自分たちで考えてやり始めました。町民向けのIT講座でスマートフォンやパソコンの使い方を教えたり、動物や自然を撮りためた写真で電子書籍の図鑑

や本を作って、図書館で町民に見てもらったりしました。3年目には、具体的な定住に向けた活動としてこのカフェを改装し、地域を盛り上げるきっかけとなるようにワンデイカフェを実施するとともに、引き続きIT事業を行っています。

自分は、地域に残るにしても独立して起業することしか考えていなかったもので、2年目の途中から嘱託職員に替えてもらい、パソコンの家庭教師やWebサイト制作の仕事の準備を進められて、すごく良かったと思います。協力隊の期間内に道北の広域での人脈づくりができたことも、今の仕事にもつながり有益でした。

苦勞したことは、役場とのやりとりと建物の物件探しです。役場では公平性を重視するために、自分の提案の8、9割が通らず、思ったことができなかったのがとても残念です。カフェの物件探しでは、空き家はあっても貸してもらえず、ここもぎりぎりになって見つけて、準備しました。

協力隊への期待と実際のギャップについては、役場は想像以上に何も考えていなかったというのが正直なところです。和寒町として何がしたいのかがないまま、協力隊を採用してしまっている感じを受けましたが、そこを選んだのは自分です。自分自身に責任があることに途中で気づいて、自分の考え方を改めてうまくいくようになりました。桑羽さんの「自分探しをしている人にはお勧めしない」とのお話は自分にあてはまります。最初から和寒でカフェをやりたい、和寒町が大好き、と思った訳でもないのに、下川町が好きで来た桑羽さんとはちょっと違います。その部分は、地域を愛して事業をしている人に比べると、自分の弱い部分だと感じています。本当に何かやりたいことがあって地域おこし協力隊としてどこかの町に入るのが、一番良いと思います。また、採用する側の役場は本当に自分たちが何をしたいのかをしっかりと考えて、採用を決めるのが良いと思います。

美深町 地域おこし協力隊OB 集落支援員

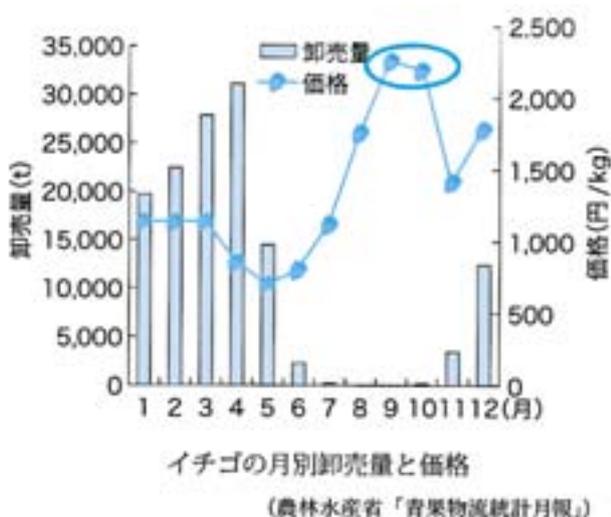
市村 匡史さん

美深町で、集落支援員をしています。この3月までは地域おこし協力隊として活動して、4月以降も活動を継続して欲しいということで、集落支援員になりました。私が、前のお二人と違うのは、応募して美深町に入ったのではなく、町から定年後に来てくれないかと誘いを受けて、美深町に移ったことです。



東京美深会の中心的なメンバーであった東京農業大学の先輩教員から、会創立10周年の記念事業としてふるさとにハーブ園をつくりたいので協力して欲しいと言われて、2000年から美深町で東京美深会や町の人たちと一緒にハーブの苗を植えています。農大にいた関係で、町からは土壌改良も含んだ農業振興についての活動と美深スキー場の夏場の景観整備のほか、美深ハーブ園の活用についてのアドバイスを要請されました。

まず、美深の自然条件を活かすことを前提に、収益が上がって高齢化や後継者不足に貢献できる新しいイチゴ栽培への挑戦を考えました。首都圏へのイチゴの出荷は、10月中旬から始まり4月頃をピークに減少します。価格は出荷量に対して当然反比例するので、品物がなくなる9～10月の時期が高くなります。この時期にイチゴを出せば、農家も収益が上げられるのではないかと考えました。



雪をスキー場の横の駐車場に積み上げてチップで完全に覆うと、7月末ぐらいまで大部分の雪を残すことができます。この雪の中にイチゴの苗を貯蔵して、既存の大産地が出荷できない時期に出荷することが可能であることは確認していますが、今後、農家レベルでの実証実験を行って、高収益なイチゴ栽培を構築したいと思っています。

スキー場の景観整備のテーマは、戦後、除虫菊を栽培していた菊丘の地名から植物の「菊」のほかに、昔の思い出やエアリアル^{※2}にかけた若い人たちの熱い想いを「聴く」と、香りを「聞く」の二つの意味を含んだコンセプトとして、ひらがなの「きく丘」としました。町からよく見える部分を白花の除虫菊を中心にした「思い出エリア」とするほか、エアリアルのコースには赤花の除虫菊を植えて若い人たちの熱い想いを聴く「夢エリア」、来てすぐ目に入る部分にはいろいろな花を植えて豊かさを表現した「豊かさエリア」、その横のハーブ類を植えた「香りのエリア」で全体の景観整備を進めるように町に答申しています。

ハーブ園には、これまでに60種類ぐらいのハーブを植えています。町の人たちになかなか足を運んでもらえていません。ですから、もっと積極的な仕掛けとしてハーブの精油の利用や簡単なハーブ料理、ハーブティーやハーブを使った草木染めなどの講座を開催して、楽しんでもらいつつハーブに対する理解を深めてもらい、その中からハーブを使ったまちおこしや町全体の活性化を図っていければと思っています。

士別市 地域おこし協力隊 南 優紀さん



兵庫県神戸市の出身で帯広畜産大学に入学して在学中に羊と出会い、1年間休学してニュージーランドに羊の勉強に行ってきました。羊を追いかけて2014年9月から地域おこし協力隊として、士別市の「世界のめん羊館」で羊の飼育をしています。

協力隊は、この牧場へ研修に来たとき、場長のお話で知りました。士別市が好きというよりも、羊が好き

※2 エアリアル
空中演技を競うスキーのフリースタイル競技の1つ。

で士別市の協力隊に落ちついてしまいました。

私は、羊の飼育管理とその合間に地域おこし協力隊の活動をしています。みんなに羊の良さを知ってもらおうと、牧場の羊を連れていろいろなイベントに参加して、羊に関するクイズや毛刈りのショーなどを行っています。また、情報発信として、羊のことをメインにしたFacebookとフリーマガジン「どうぶつのくに」での発信のほか、テレビやラジオに出演して、羊や士別の良さを伝えています。毎日、牧場で羊と関わりながら飼育管理を学び、最終的には羊の牧場を持つ夢に向けて日々活動しています。

私の場合は、大学を卒業して最初の社会人の経験が地域おこし協力隊です。兵庫県から来た者としては、理想の田舎暮らしがかない、ご近所さんとのつき合いで毎日楽しく過ごしています。残念なことは、若い人が少なく同世代とのつながりを持つことが難しいことです。大学を卒業したての若者が地域に入り込むことがすごく難しいと、日々感じています。また、地域の人のまちおこしの熱意に差があることが感じられます。先ほど桑羽さんがおっしゃっていた価値観の違いを私も感じています。それも自分の考え次第で変わることですが、最初にギャップとして感じたことはすごく大きかったです。

私は、具体的な目的があったのでやり易かったです。観光などもっと枠の大きな目的を持って来た協力隊の方からは、特に1年目に何をしたらいいのかがわからなかったと聞きました。ですから、協力隊を受け入れる時点で、具体的な目的とかプランを明確に示してもらえると、来る側は来やすいし、明確なビジョンがわかり、活動もし易くなるのではないかと感じました。

地域へ入り込む難しさに対し、いろいろな情報やサポートも得られるので、役場との連絡や話し合いなどを日々行うべきだと思います。地域の人とのつながりという面では、地域には探すとおもしろい人がいっぱいいますが、探さないと見つかりません。しかし、自分から入っていくことは難しいので、初めのうちは役場の方を頼りに、地域の人とのつながりをつくと、その後の活動がやり易いと感じます。実際に一緒に活

動するのは地元の方たちなので、地域の人とのつながりをつくるのもとても大切なことです。

自分は協力隊として1年目が終わり、2年目に入るところです。まちを歩いていると声をかけてもらうことが増えて、やっとこの士別市でつながりができてきたと感じています。つながることのできた人たちと協力して、自分の好きな士別を表現するイベントなどができたらいいなと思っています。また、士別を好きにならなければ、地域おこしはできないと思います。私は羊を追って士別に来たので、このまちのことを余り知らずに来ました。これから、もっと士別のまちの良いところを探しながら、好きになることで自分の活動につなげていけたらと思います。士別の良さと、その士別で飼っている羊の良さを伝えるために、私はこれから活動をしていきたいです。



現地研究会の第二部は「これからの地域運営と人材調達」と題して、自治体が期待する人材像などについてフリートークを行いました。その概要は2月号の「開発こうほう」で紹介予定です。